

図書だより 読書感想文特集

2020. 7月



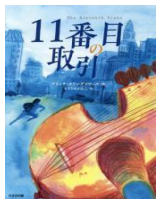
もうすぐ夏休みです。今年も本を読んで、青少年読書感想文全国コンクールに応募しましょう。対象の本は、課題図書と自由図書の2種類があります。夏休みになる前に本を読んでおくと、あとは書くだけです。早めに準備しましょう。

《青少年読書感想文全国コンクール 課題図書の紹介》



『**天使のにもつ**』いとうみく著／童心社

中学2年生、斗羽風汰の職場体験先は、子供と遊んでいけばいいという軽いノリで選んだ保育園だった。ところが、想像とは全く違い…。5日間の職場体験の物語。



『**11番目の取引**』アリッサ・リッグ・スワース著／鈴木出版

アフガニスタン難民のサミと祖父の生きる術であり、心の拠り所だった伝統楽器ルバブが奪われた。買い戻すには1ヶ月以内に700ドルが必要だ。サミは友達の助けを借りて自分の持ち物で物々交換を始める。希望と友情の物語。



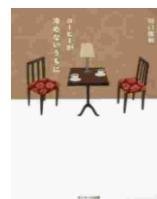
『**平和のバトン 広島の高校生たちが描いた8月6日の記憶**』

弓狩匡純著／くもん出版

被爆証言者の記憶を、美術を学ぶ高校生が絵にして記録する「次世代と描く原爆の絵」プロジェクト。平和な広島で今を生きる高校生たちが戦争や原爆を見つめ直していくさまを綿密に取材して描いた、平和について考えるノンフィクション。

《おすすめ自由図書》

家族



『**コーヒーが冷めないうちに**』川口俊和／サンマーク出版

ふしぎなうわさのある喫茶店を訪れた4人の女性たちが紡ぐ、家族と、愛と、後悔の物語。

『**博士の愛した数式**』小川洋子／新潮文庫

「ぼくの記憶は80分しかもたない」博士の背広の袖には、そう書かれた古びたメモが貼留めてあった。あまりに悲しく暖かい、奇跡の愛の物語。

『**ホームレス中学生**』田村裕／幻冬舎

父親の解散宣言で、13歳の僕は突然家を失う。笑って泣ける貧乏自叙伝。

名作



『**モモ**』ミヒャエル・エンデ／岩波書店

この世にあらわれた時間泥棒のせいで世界は荒んでいく。人々を救ったのは無口な少女「モモ」だった。

『**羅生門**』芥川龍之介／理論社

荒れ果てた門の上で行き場を無くした男が見たものは、死体の髪を抜く老婆の姿だった…。

『**高瀬舟**』森鷗外／角川文庫

自殺に失敗し、苦しむ弟。彼を殺して島送りにされる喜助に、罪はあるのか…。

裏に続く…

青春



『きみの友だち』 重松清／新潮文庫

「友だち」の本当の意味をさがす連作長編。

『カラフル』 森絵都／文春文庫

死んだはずの僕は、自殺を図った少年の体にホームステイすることになった。

『夏の庭』 湯本香樹実／福武書店

僕は、人が死ぬ瞬間を見てみたいという好奇心から、一人暮らしの老人を見張ることにした。喪われ逝くものと、決して失われぬものとに触れた少年たちを描く清新な物語。

『フラダン』 古内一絵／小峰書店

女子率100%のフラダンス愛好会に集められた4人の男子高校生。震災から5年後の福島を舞台に描く、とびきりの笑顔と涙の青春ストーリー。

『一瞬の風になれ』 佐藤多佳子／新潮文庫

中学時代はサッカー部だった主人公新二は、高校の陸上部で自分の才能を開花していく。

『西の魔女が死んだ』 梨木香歩／新潮文庫

中学生になってから不登校になってしまった少女まいは、その夏を西の魔女と一緒に過ごした。

『君の隣をたべたい』 住野よる／双葉社

偶然、僕が拾った1冊の文庫本。それはクラスメイトである山内桜良が綴った、秘密の日記帳だった。

『4 TEEN』 石田衣良／新潮文庫

中学2年生の4人組が、それぞれ悩みを抱えながらも、さまざまな出来事を精一杯に受け止めて成長していく。

『いちご同盟』 三田誠広／集英社文庫

「あたしと心中しない？」ガラス細工のように繊細な少年の日の恋愛と友情、生と死をリリカルに描いた物語。



考えさせられる



『あそこはフリードリヒがいた』 ハンス・ペーター・リヒター／岩波書店

ヒトラー政権下のドイツ。その時代に生きそして死んでいったユダヤ少年フリードリヒの悲劇を、同年のドイツ少年の眼を通して鋭く描いた作品。

『アルジャーノンに花束を』 ダニエル・キイス／早川書房

32歳になっても幼児並みの知能しかないチャーリー・ゴードン。手術により彼の知能は向上し、ついに天才へと変貌する。知を求めさまよう青年がやがて知る、ほんとうの愛とは？

『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』 ブレイディみかこ／新潮社

大人の凝り固まった常識を、子供たちは軽く飛び越えていく。世界の縮図のような日常を描く、落涙必至のノンフィクション。

『クジラのおなかからプラスチック』 保坂直紀／旬報社

海のプラごみ汚染。このままでは2050年に海の魚の重量を上回るともいわれるプラスチックごみ。今世界が最も注目する環境問題がよくわかる。

『杉原千畝物語 命のビザをありがとう』 杉原幸子／金の星社

1939年リトアニア日本領事館の杉原千畝は、外務省の命令に背いてユダヤ人のためにビザを発給し続けた。

*** 図書室に展示してありますので、見に来てくださいね ***